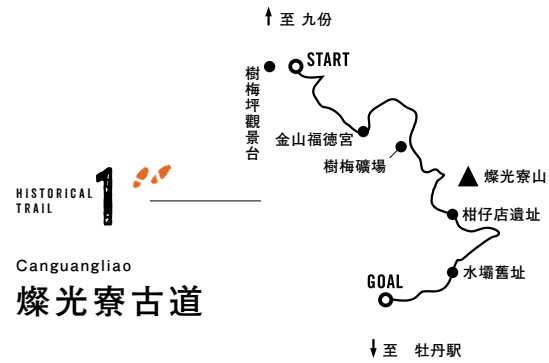


歩きながら海を眺めるのは、
島ならではの醍醐味！



スタート地点の樹梅坪展望台から台湾のハイカーに人気の基隆山(588m)が一望できる

樹梅坪を過ぎると、日本の伊豆の山々を思わせるような草原に囲まれたトレイルを進む。秋の風が通り抜け、心地よい



Canguangliao
燦光寮古道

日本人観光客の多い九份(きゅうふん)からも近く、海まで見渡せる絶景あり、しっとりとした森歩きありと、バリエーションに富んだ景色が魅力。総距離約5.4km。全行程の歩行時間は4時間30分。



1) 小さな葉が木にまとわり付き、静かな森を華やかに飾る。2) 古道の途中、迷いやすい個所には道標があり安心して歩ける。3) 教えてもらったこの植物は通称「とりのフン」。ブルーの実がかわいらしい

**自然と町をつなぐ
歩く旅、台湾。**

公共交通機関が発達し、どこへ行くのにも困ることが少ない現代。日本と台湾も国こそ違っても、たった4時間で行くことができちゃうのだから、多くの日本人が行きた「国」として挙げるのも頷ける。もちろん、台湾には女性の心を魅了する食やモノ、自然があることを大前提として。

すべてのことが時短で行われるいまだからこそ、あえて時間をかけてひとつのことに向き合ったり、立ち止まり周りを見渡してみたりするこ

とで、新しい発見や興味に出会えることもある。急行電車を各駅停車に歩いてみれば、周りの景色はまったく違ったものに見える。植物や花の匂い、古い階段や新しいお店、路地裏の小さな公園、地元の人たち。そんな出会いがあるからこそ、訪れる場所での「歩く旅」をおすすめしたい。今回訪れたのは、台北市から電車で1時間ほどの新北市。そこには、かつて人々が生きるために歩いた古道がある。すべてをつないで歩くことは難しくても、道と町を切り取りながら台湾をもっと深く知る日帰り旅はいかがだろう。

台湾・新北市

淡蘭古道とふもとの町を歩く旅

日本を飛び立ち4時間。降り立った台北松山空港からMRTを乗り継ぎ向かうおとなりの街・新北市(しんべいし)。いまもなお残る古道を歩き、歴史に思いを馳せ、町を歩いて、また台湾が好きになる。

Photo: K. Miyata 宮田幸司 Illustration: C. Kagure コウチエ
Text: M. Aniya 安田昌香 Vance(P088~089)



台北市をぐるりと囲むように位置する新北市。そこに残る「淡蘭古道」は、いまから約200年前、北台湾の漢民族が西方から東方へ発展した時代(清代)、淡水廳から宜蘭噶瑪蘭廳を結び人々が行き来をする主要道路として栄えていた。おもなルートは3つ。軍事防衛、公文書の発送など官道として整備され一番早く発展した「北路(官道)」と、先人たちが生活のために開拓した山道であり、異民族間の武力衝突から和解までのさまざまな記録が残る「中路(民道)」、茶業が100年を経て経済として成り立ったことを機に、1885年に道を作ったり、警備兵を設置したりして開拓した「南路(茶道)」。いまではロングトレイルルートとしても、多くのハイカーに愛されている。



今回紹介するのは、淡蘭古道・北路のなかの「燦光寮古道」、「石碑古道」、「楊廷理古道」。歴史を感じる石畳の道や史跡、個性豊かな植物が見られるほか、ふもとの町歩きも併せて楽しめる日帰りルートだ

猫から始まる 淡蘭古道の人気ルート

カメラを首から下げた観光客と、アウトドアウェアに身を包みバックパックを背負ったハイカーで賑わう猴硐駅。それぞれのお目当ては、100匹以上の猫がほのぼのと暮らす「猫村」と、淡蘭古道の中でも人気のルート「金字碑古道」。猫村は、言わずと知れた台湾の人気観光スポット。金字碑古道を歩くハイカーにとっても、ハイキング前のお立ち寄りスポットとしては華やかで魅力的だ。猫モチーフのお土産も、欠かさない。

炭鉱の町として栄えた猴硐は、1920年に瑞芳から猴硐間をつなぐ鉄道が開通することで、全国各地へ石炭を運ぶことができたという。駅前には、いまは廃墟となった建物は、当時は選炭場として使われていた場所。「願景館」でその歴史を学ぶことも、このルートのはじまりとしてふさわしい。

金字碑古道の登山口に辿り着くと、すぐにこのルートが人気である理由が理解できた。苔むしながらも、キレイに整備された石段が、森のずつと先まで続いているようすがとても美しい。「古道の王道」と言ってもまったくいいビジュアルと、誰にでも歩きやすい道が地元人のハイカーを



猴硐駅から金字碑古道の入口までは歩いて30分ほど。新しく建てられた道標を目印に、ここから先は整備された石段と美しい緑のトンネルが続いている

HISTORICAL TRAIL 2

Jinzibei
金字碑古道

START ● 天燈亭
● 猴硐駅
● 金字碑
● 奉憲示禁碑
● 慶雲宮 ● GOAL

↓ 至 牡丹駅

苔むす美しい森に敷かれた石段を進む古道の歴史は200年余り。進むたびに深くなる森の途中、上りの終点付近にある「金字碑」は新北市の文化財にも指定される。総距離約3.4km。全行程の歩行時間は3時間。



1、2) 休日になると多くのハイカーで賑わう金字碑古道。キレイに整備され歩きやすい石段や石畳は苔むして、雰囲気もバツグン。3) 最後の上り坂を上りきると、遠くには海と基隆島が見渡せる絶景が広がる。ここから先は下り坂へ。4) かつては金箔が塗られていたという「金字碑」

魅了しているに違いない。踏み出す一歩を写真で切り取っても、とても画になる。

古道の名前にもなっている「金字碑」には、清朝の台湾総指揮官・劉明灯が宜蘭へ向かう途中にこの場所を感じたことが刻まれているという。ここまで歩いてきた、いまの私たちの気持ちを刻むとしたら、「美しい自然を見せてくれる、この古道に感謝します！」こんな感じだろうか。

金字碑を越えると、視界が開け、東側の海が見渡せた。「わぁ、海だ！」

達成感にも包まれ、思わず漏れる感嘆の声。先住民の人たちも長い道中、この景色を眺めながら、おなじみ気持ちになっていたのだろうか。ハイキングを楽しみながら、この道歩いた何百人、何万人もの人々に思いを馳せる。それも古道ならではの楽しみ方だ。



金字碑古道のスタート地点となる猴硐は、たくさんの猫が暮らし、多くの観光客が訪れる猫村がある駅としても有名。改札を抜け猫橋を渡ると、猫モチーフの商品がずらりと並ぶ土産物屋や、窓際で日向ぼっこをする猫がお出迎えをしてくれるカフェなどが多数あり。お気に入りの猫を探せるはず！



TAIWAN_ NEW TAIPEI CITY 訪れたい町並みも、歩きたい古道も、楽しめる黄金ルート

SHOP_3
猴硐煤礦博物園區 遊客中心
▲新北市瑞芳區光復里新介壽橋頭 ☎02-2497-4168
🕒8:00~17:00 (年末は8:00~12:00)
📶なし



SHOP_2
猴硐煤礦博物園區 旅遊資訊中心
▲新北市瑞芳區榮寮路42號 ☎02-2497-4143
🕒8:00~18:00 (年末は8:00~12:00)
📶なし



SHOP_1
猴硐願景館
アクセス：猴硐駅向かい
🕒9:00~18:00 (年末は9:00~12:00)
📶なし



猴硐駅前には、日本語で書かれた猴硐周辺の観光パンフレットがもらえる旅の情報センターや、炭鉱時代の歴史が学べる資料館などもあるため気軽に立ち寄りやすい



1) 古民家だった燦光寮12号は、いまでは雑草に覆われている。頼りないレンガの壁や、簡易な鉄板屋根が見られ、昔の人々の暮らしが想像できる。2) 分岐点には、民間団体が付けてくれたマークも。紙の案内板や木の枝のボンなどもあり、安心できる。3) 途中で大きなキノコを発見。よく観察すれば、いろんなかわいい植物が見つかるはず。4) 燦光寮は、清時代に政府が設置した公文書を送達する拠点であり、兵士を訓練する場所でもあった



SHOP_1
黑白毛海鮮店
■新北市貢寮區仁和路51号
☎02-24901152
🕒11:00～21:00
📍不定休

1) 店内は華やかではないが、おいしく新鮮な料理が評判。2) 刺身の盛り合わせにはマグロ、カジキ、ブリなど。台湾の海産店には、刺身を厚切りする店が多い。3) イカの唐揚げとカラフルなエビせんべい、青ネギと唐からし添えて、彩りに溢れる。4) その日に捕れた新鮮な水産物が店の前に並べられる



TAIWAN
NEW TAIPEI
CITY
小さな冒険の旅は
いつも不思議なプチ発見

地面に生えるオニクラマゴケ、人より背が高いオオタニワタリなど。途中で見つけた秘境のような小池は、なんとハートの形！

第一段階歩道の出口まで歩くと、慈願寺行きの案内板があり、産業道路まで続いていく。そのまま進むと、道路沿いには淡蘭古道の立体案内板のモチーフであるヤブレガサウラボシを発見！

しばらく歩くと、慈願寺の案内板があり、次のルートの入り口となる。後半は下り坂になり、楽になるかと思ったら、前日続いた雨で地面がドロドロ。苔が生えた石段もあるため、一歩一歩慎重に。

下山したあとは、もちろんご褒美のグルメが外せない。海に近い澳底漁港は、広くないが漁獲量が多く、周りには海産物の食事処が並ぶ。

しとしと雨が降る午後。選んだ「黑白毛海鮮店」はとて有名で、わざわざ遠くから足を運ぶ人もいるほど。メニューの種類も豊富で、店の前の水槽では活き活きと泳ぐ魚も。刺身やサンゴソウ、茹でタコ、イカの唐揚げを注文。どちらもおいしく、箸が止まらない！

このように日帰りで楽しめる小さな冒険コース。もつと長いコースに挑戦するなら、澳底から福隆まで自転車に乗り、旧草嶺隧道を歩いて宜蘭石城まで行くコースもおすすめだ。



1) 楊廷理古道はとても原始的で、樹木と草に囲われた道がほとんど！ 2) 黄吉祠へ出るとこの案内板が見られ、そのまま産業道路を歩くと、慈願寺行きの歩道入口が現れる。3) 歩道をしばらく歩くとせせらぎがあり、多くの石には苔が生えているため、気を付けながら歩きたい。4) このハート型の小さな池は、うれしい発見！ 周りに緑が囲われ、とてもかわいい。5) 道路の周りには人より高いオオタニワタリも。波打ったような葉で、標高500～1500mの台湾の山地でよく見られる

HISTORICAL TRAIL 3
Ting-Li Yang
楊廷理古道

約200年前、清朝の嘉慶帝時代に入蘭道路(宜蘭行き)として開拓された楊廷理古道は、台湾の山地のなかでもっとも古い官路とされる。人通りも少なく当時の面影が残るルートは、時間の流れがゆっくりと感じられる。総距離約6.6km。全行程の歩行時間は7時間。



原始的な姿を
歩いて、感じる

人の名前が付けられた楊廷理古道。1807年、海賊の朱濱を討伐するため、当時の台湾知事・楊廷理が、軍隊を連れてこの古道を造ったとされている。この古道に関する文献の記載は、はつきりとしていないため、本道の起点と終点がよく分からないという。そのため近年、新北市政府が昔の石階段を利用しながら石段を整備し、燦光寮舗を起点と定めた。燦光寮舗は昔、兵士の訓練と公文の発送のために使われ、いまも遺跡が残され、当時の光景が想像できる。今回は燦光寮12号から出発し、慈願寺まで歩くことに。燦光寮の近くにある黄吉祠を目印に、いよいよ小さな冒険が始まる。

古民家だった燦光寮12号の外から中を覗いてみると、だれかが祖先を祀りに来ているよう。レンガで作られた壁には隙間があり、建物の周りには雑草が生い茂り、時の流れを感じ

その先からは竹林に入り、本格的な古道がスタート。森のなかをゆつくりと歩くと、原始的な雰囲気広がる。草が道路側まで生え、クモの巣も張っている。植物の種類がたくさんあり、おもしろい名前をもつツツリノフン、樹(タイワンルリミノキ)、